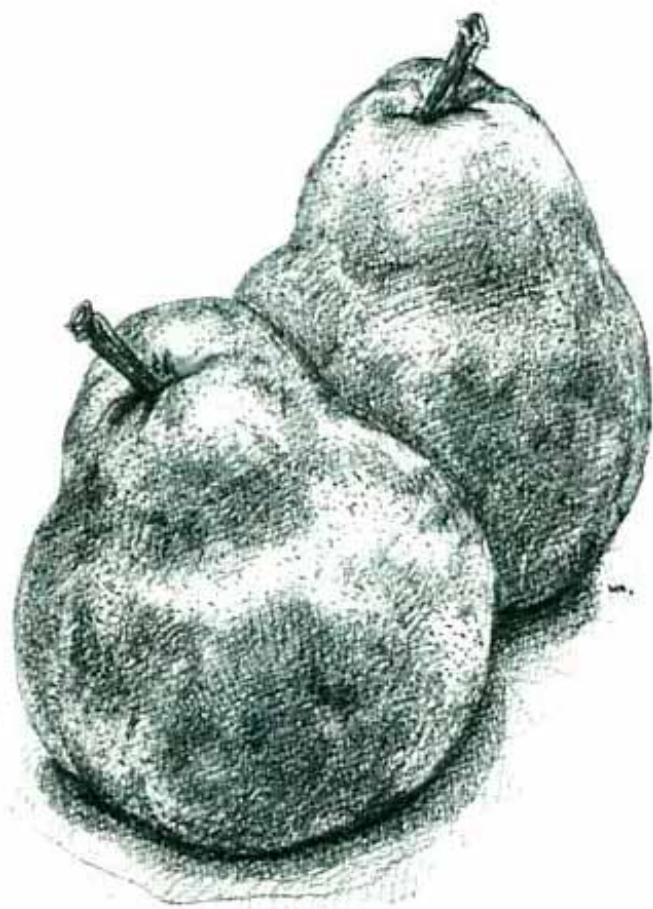


昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成22年7月5日発行（毎月5日13日発行）
第50巻7月号（油色420）

風土



麦の秋
神蔵器

風薫る大小竹の筆二本

恋猫の闇の寝刃を研ぎ澄ます

明慶の文珠菩薩や青嵐

食扶持の一反一畝麦の秋

燕育つ足湯の上の軒庇

首塚や裏にそら豆 煮んどう豆

山立てて烏賊釣舟の火や集ふ

七七忌螢を呼ぶに闇足らず

たかし忌や鉄砲百合のこちら向く

十葉干す婆の十指のひらひらと

栗の花匂ふ一步や与謝郡

小夜さんの法写決まる

芳徳院咏小智華大姉緑さす



竹間集

同人作品



春落葉

代田 青鳥

一人用の俎板干して春惜しむ
リラ並木地下へ潜りし映画館
暮れ泥む学園の街ライラック
雲のびて遠足の列繋がりぬ
その中に白鳩憲法記念の日
行く春の剥落深き国分尼寺
剥落の回廊に積む春落葉

春の鴨

関根 洋子

春の鴨一人となりし戸籍かな
白光の中少年としやぼん王
清貧といふ身軽さに嫁菜摘む
波が磨ぐガラスの破片啄木忌
指先のすこし冷たき穀雨かな
ぜんまいの呆けてゐたり一揆の地
かながわの美林芽吹きの匂ひせり



蜷の道

川中佐知子

咲き初めし桜の幹やあたたかく
みづうみの眩しきあした蜻蛉生る
猿除けの囲ひの畑の葱坊主
もつれゐる我が影ぬちの蜷の道
遅日かな竹生島より最終舟
余花残花母がだんだんとほくなり
五月鯉火山灰畑の土匂ひたつ

山の水

工藤ミネ子

鳶苗や夜泣きの椿落ち継げる
春の日や引きてあふるる山の水
のどけしやチャイムが村を抜け出せり
置き去りのやうに村あり福寿草
耕人のあやすがごとく畝を盛る
きぶし咲く馬頭観音碑に解れて
滾りだす大釜ふたつ春祭

朝ざくら

柴田 久子

苗木市車に積めるものを買ふ
川一本呑み込んでゐる朝ざくら
船が船曳きゆく川の霞みけり
山彦の湿りて戻る啄木忌
鉛筆はBばかりなり入学す
あの世まで花追ひかけて逝きにけり
涙眼に杓の傾く春北斗

雨上る

中村 洋子

雨上る西行墳へ花の道
花の山弘川寺の膨らめり
臃かな西行法師消息文
永き日の鳥羽街道にさしかかる
花冷えの法然院の礎上る
臃かな枯山水をつつみゆく
祝ひ事重なりあひて八重桜

糸ざくら

橋添やよひ

木屋町に抜け路地多しつばくらめ
魂を天にゆだねし糸ざくら
花臃蓮月棲みし草屋かな
竹秋や一休庵の干し納豆
鹿ヶ谷奥ざうざうと竹の秋
葛城の花を訪ねて西行忌
西行庵跡の日溜董咲く

淋しき夏

— 塩田 博久 —

朝刊を取り薔薇の香をふりかぶる
天を指す宝珠をあまた薔薇蕾む
庭ぢゆうに蔓引き回し薔薇の海
庭ぢゆうに香り溢れて薔薇の海
薔薇繚乱千の蕾を従へて
薔薇咲きてより風音に聴くをり
妻呼べば薔薇の中より夏帽子
走る子の手のきらきらとクローバ咲く
鯉の背の立つる水輪や朝涼し
人はみなかく去り行くか淋しき夏

山河集

同人作品



神蔵
器選

諏訪御柱祭

残雪に高遠桜紅を差す
斧立は男の自慢春木遣
坂落す春宮一の御柱
由布姫参らず春宮は軍神
御柱木落し合図も春木遣

上辻 蒼人

根岸 善行

噂の高さ日和の高さかな
怠けたくなりてなまけて春惜しむ
起承転・結に留まり春惜しむ
あたたかや地球に触るる掌

小夜様の齋場にて

春山をゆり動かせし骨ならむ

春眠の姿勢のままに永眠す

豎山 道助

満開の桜の下の生者死者
借景の一点として燕来る
春の川水の速さとなりけり
白魚のすべて略して死にけり

小林 共代

真向ひし山を見つめて入学す
多摩川を渡りて春を惜しみけり
牡丹に卑弥呼の色のあるけり
桜東風男結びに垣結はれ
綿菓子をつぎつぎ膨れ桜どき

雨宮 桂子

耳たぶの大きほとけやわらび餅
雲中に蔵王権見山ざくら
花冷えの足下に拝す忿怒仏
水分の子守明神雉子鳴く
ひとつふたつ西行庵へ山すみれ

◇特別作品◇(抄)

花の頃

石川 友江

桜 咲く 山 を 掲 げ て 漁 師 町
松 陰 像 指 差 す 彼 方 遠 霞
船 笛 の は る か な り け り 諸 葛 菜
黒 潮 や 岬 に エ リ カ 咲 く 小 徑
春 の 潮 人 形 橋 ま で 遡 る
燕 飛 ぶ 干 物 横 丁 軒 低 く
児 等 歌 ふ 大 き な 桜 の 木 の 下 で
げ ん げ 田 の 角 に 傾 く 札 所 の 碑
花 め ぐ る 旅 な り 海 も 山 も 見 て
廃 寺 か な 人 を 招 き て 山 桜

風土独語／神蔵器



坂落す春宮一の御柱 上辻 蒼人

諏訪人社は上社と下社に分かれ、諏訪市に上社本宮、茅野市に上社、前宮があり、下諏訪町に下社春宮と下社秋宮がある。恥かしいことに私など上社と下社の二社しか頭になく、御柱も八本と思っている。御柱祭は上社前宮、下社秋宮も同様に行われ、それぞれの氏子が担当し、御柱は四社で十六本である。

掲出句は春宮とあるので下社春宮である。今年の日程は、山出しが四月九・十一日。里曳きが五月八、九、十日となっている。一の御柱が最長約十七メートル、直径一メートル余り、重き十トンを越えるモミの巨木という。

掲出句は春宮一の巨木を坂落す最高最大の見せ場である。もし文章に書けば単行本の一冊や二冊は優に書けるほどの内容である。俳句はそれを十七文字のうちに掴み取り表現しなければならぬ。

ここで作者は「春宮一」の巨木と「坂落す」という人間の行為を全く別々のものと見る。そして別々のものが何かの力によって衝突し、ぶつかり合ったりすれば轟音と共に火花が散り骨が砕け、血が流れ、悲鳴が上ったりする。こんな時は一歩退っていわゆる二句一章の表現方法が適切ではないか。「春宮一」と「坂落す」

という二物の間の空間が大きければ大きいほど、断層が深ければ深いほど衝撃(感動)は大きくびびき合い増幅される。読者のもっている知識にも頼るところがあるかも知れないが、桓武天皇時代から連綿と受け継がれた古式にのっとった勇壮な御柱祭の大景が見えて来る。見事な句である。

白魚のすべて略して死ににけり 豎山 道助

白魚だつて魚であるから、生きている時は、鱭、鰻、尾鱈等もあり、呼吸する肺だつてあつた。そして何より体全体透き徹つた美しさ、輝きがあつた。死はそれ等のすべてを奪い去つた。それは決して白魚自身が望んだことではない。

私はもう二十数年前になるが、舞鶴の浜明史さんたちと一夜、白糸旅館で鱈(いさぎ)の躍り食いが饗された。ぴちぴち跳ねる元氣ないさをどうしても口にするのが出来なかつた。

掲出句は「すべて略して」と一人称である。「己の運命のつたなさに嘆け」というのか。人間だつて最後は白魚と同じだ。やりきれなくなつた。(以下略)

風土集



神蔵 器選

花筏 原子力艦 入港 す川崎

豎山 道助

ブラジル国歌明日入学の子と歌ふ

県境は橋の真ん中鳥帰る
春眠の中で洗ひし父母の墓

木曾五木わけても春の雨の中

咲ききらぬ初花の冷えまさりけり

相模原

奥山 絢子

ひとひらの名残の花の散りにけり
使はずば滅びる言葉 春愁

一身も過客の身なり濃山吹

初燕見知らぬ街へたのもしき

徳村 伸一

上尾

根岸 善行

暖かき日和のごときひととなり

囀の高音朝日に届きけり

春嵐雲の上ゆく月明かり

あふとつ凹の部分の春惜しむ

夕刊も手紙も来ぬ□遅日かな

平塚

中沢 三省

のこされし月日は知らず青き踏む

握りしむ砂のぬくみや啄木忌

病床より入学の子を送り出す

内科・外科山と積まれし大試験

実朝の海を眼下に嫁菜摘む

百千鳥コントラバス抱き少女来る

横浜

下山田 美江

燕来てフラワーセンター休園日

五ページのファックス送り粽食む

往来の浦賀の渡しし入学す

逃水や磯路は自然のミュージアム

杉の花けふる禅寺いつもひま

郡山

小野 すみ子

舟唄や早き流れも春の水

古里の武骨なる山あたたかし

会ふも花別るるも花啄木忌

をどり子草静かに雲の通りけり